
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

第23号 2016年3月

文芸学科における授業構築・運営と展望

Class Building, Operation and View in Literature Department

玉井 建也 | Tatsuya TAMAI

石川 忠司 | Tadashi ISHIKAWA

野上 勇人 | Hayato NOGAMI

池田 雄一 | Yuuichi IKEDA

川西 蘭 | Ran KAWANISHI

山川 健一 | Kennichi YAMAKAWA

文芸学科における授業構築・運営と展望

Class Building, Operation and View in Literature Department

玉井 建也 | Tatsuya TAMAI

池田 雄一 | Yuuichi IKEDA

石川 忠司 | Tadashi ISHIKAWA

川西 蘭 | Ran KAWANISHI

野上 勇人 | Hayato NOGAMI

山川 健一 | Kennichi YAMAKAWA

This article is describing lectures and activity in Tōhoku University of Art & Design, art department, literature department. The contents are a class curriculum, the class contents, a literature magazine, the students who has debuted and graduates. This is activity of an introduced department from various points of view.

Keywords:

literature, literature magazine, Class curriculum of a literature department

1. はじめに

本稿では東北芸術工科大学文芸学科における授業の取り組みを通じて、クリエイター育成に留まらない様々な学科運営の検討を行っていく。まずは文芸学科により制作・頒布されているパンフレットの紹介文を踏まえて、本学科の取り組みを見ていく。なお本学科のパンフレットは書かれている文章およびDTP、デザインも含めて全てにおいて文芸学科教員によるものである。内容は「文芸学科案内」、「小説の書き方」、「小論文の書き方」、「編集者の仕事」、「学術論文の書き方」、「AO入試対策の考え方」の6種類になり、オープンキャンパスを中心として配布されている(図1)。



図1:文芸学科パンフレット

1.1 文芸学科のコンセプト

文芸学科で学ぶことに関して、パンフレットでは「創作と編集」、「企画」、「出版」の3つに分けられている。これらを受けてパンフレットでは「さまざまなメディアで自分の言葉を手軽に発信できる時代になりました。だからこそ、文芸学科では情報の混沌に埋没しない、個性的で訴求力のある言語表現を追究します。基本的な作文から始め、より複雑で高度な創作、小説やエッセイを書く力を培っていきます。そ

して、編集する力は、学内外での取材、記事の作成、本格的な編集ソフトを使っの誌面作りなど、印刷や製本までを含めて実践的に養っていきます。日本語を鍛え、心に響く魅力的な表現を追求する。文芸学科で得た力は、どんな職種や企業でも役立つはず。幅広い分野で活躍できる人材の育成に取り組んでいます」とされている。

これに対しコンセプトとして「文芸学科で身につく4つの力」を挙げている。「よき作家、よき編集者を育成する教育は、そのままで、よき社会人、つまり、自立して豊かな人生を送れる人間を育成する教育になる、と文芸学科では考えています。よき作家=よき社会人がそなえるべき能力は次の4つです」として、具体的には「創造力(自分らしさを発見し表現できる):創造とは作品を創り上げる行為だけを意味しません。瑞々しい創造力は、感受性を磨きながら自分らしい人生を切り開いていくことに通じています」、「想像力(言葉に対する意識を高くもつ):美的な意識をもって、適切に言葉を選択していく能力です。日常から飛躍した世界や他者の内面的な痛みなど、自分の体験の外に広がる世界を目の前に生き生きと現前させるこの能力が、創造力と社会性をつなげます」、「意志(目標に向かって持続的な努力ができる):自分の将来を設計し、それを実現するためにやるべきことを逆算し、高い忍耐力で実行していく能力です。社会で仕事をするにも不可欠です」、「社会性(教養人として自立し積極的に社会参加できる):豊かな教養によって客観的に社会を見つめ、自分のやるべきことを踏まえた上で、能動的に社会参加していく力、および他者の意見に耳を傾けつつ、自分の意見を的確に発していくコミュニケーション能力です」と示している。

1.2 文芸学科における授業

1.2.1 「書く」授業に関して

では既述のコンセプトを踏まえて、どのような授業が行われているのであろうか。まずは「書く」に関してパンフレットには「文芸学科の「書く」レッスンは2つの柱から成り立っています。1つは「ベーシックな日本語をきちんと書くこと」。もう1つは「オリジナルな表現力を獲得すること」。社会的・日常的な伝達においてはわかりやすく美しい日本語を活用でき、創作においては規範的な日本語の中に「自分らしさ」を持ち込んで他者を感動させることが出来る、文芸学科ではそうした2つの文章力を身につけるための様々なメソッドを用意しています」と書かれている。これを受けて、いくつかの具体

的な授業内容に関して説明が行われている。

まずは「選」リストの作品を要約する」として「週に1作、文芸学科図書リストから指定された作品を読み、要約を書きます。独自のシートを利用して、主な登場人物と重要な出来事を書き出し、概略をまとめ、最終的に要約を200字で書きます。漫然とストーリーを追う読書から、書き手の意図を注意深く読み取る分析的な読解への切り替えが最初の1歩です」とされ、次に「キャラクターを異世界に投げ込む」として「物語の中のキャラクターと物語世界との関係を考え、創作に活かすための実験的な試みです。お馴染みの有名キャラクターを物語世界から取り出し、まったく異なる世界に投入して短い物語を書いてみます。キャラクターの役割と意味はどう変化し、物語世界はどんな影響を受けるのか。実作を通じて考察します」と説明されている。また「昔話を「小説」にする」では「昔話と小説とは決定的に違います。昔話は物語のはほぼ骨格だけでできあがっているのに対し、小説はそこに登場人物の内面、葛藤などがつけ加わります。昔話の骨格を的確に見極めて「小説化」する作業を通し、物語における不変の要素(物語構造)への感覚、および細部に渡って登場人物を肉付けする作法を学びます」と書かれている。

1.2.2 「編集」の授業に関して

次に編集関係の授業であるが、編集に関して「編集とは書籍や雑誌やインターネットのコンテンツを作成する技術である以前に、世界をどんな視点で見るのかという哲学です。未知の視点の発見によって世界の「創造」が可能になる。大切なのは、すべての新しい視点は常に言葉の力で成り立つということでしょう。例えば単行本の場合、斬新な書名を発想することがそのまま視点の発見になります。「言葉」をキーワードにして、創作や企画と有機的につながりながら、編集を学んでいきましょう」とされており、具体的な授業としては「写真を物語にする」として「編集とは「世界」を独自の視点で切り取る作業です。このレッスンでは与えられた1つの写真から2通りの物語を考えてもらいます。題材は同じでも、力点の置き方や連想の方向性や注目する細部の違いによって、まったく異なる「世界」が提示できる。編集の基本的なセンスは、こんなところから身につきます」と説明している。次に「インタビューして文章にまとめる」として「文字で記された歴史だけが歴史のすべてではありません。語り伝えられる歴史の重要性が近年、再認識されています。

口承を記述することも文芸の大切な役割のひとつです。人から話を聞き、それを言葉にして書き記す。そのためににが必要なのか、心構えから技法まで実践的に学び、理論的に整理していきます」と書いている。最後に「百科全書」を作成する」として「フランスの啓蒙思想の運動のなかで、ルソーら啓蒙思想家たちによって作成された『百科全書』。このレッスンでは、『百科全書』の作成を行います。そこでは、1つの書物を共同で作成していく作業と、チームプレーを度外視して執筆に専念する作業という相反する能力が要求されます。編集に必要な両方の能力を、実践的に養います」と示している。

1.2.3 「企画・出版」の授業に関して

「企画・出版」に関しては「人間にはさまざまなエモーションやアイデアがあります。作家が実際に「発語」することによって、それらは小説やノンフィクションや評論などの具体的な作品となる。そうして生まれる個々の作品をどう見せ、どんな方法で流通させるのか？ それを学ぶのが文芸学科で「企画し、出版する」ということです。大手出版社で全国流通させる単行本企画から、インターネットのオンデマンド出版まで、多種多様な出版の方法を学びます」とし、さらには「読者の顔を思い浮かべる」として「企画のターゲットとなる読者の年代、性別、嗜好、ライフスタイルなどをできるだけわしく、具体的に思い描く作業をグループワーク形式で行ないます。さまざまな意見や知恵を出し合うことで、よりリアルで客観的な読者像を想定し、そこで求められる見出し付け、文体選び、レイアウト作りにつなげていきます」と深めている。また「時代を数値化して理解する」として「数値化は「文芸」と無縁のイメージがあるかも知れません。しかしたとえば「恋愛」に関する単行本を企画編集する際、「25～34歳の独身男性のうち3人に1人は交際経験がない」等のデータ収集は不可欠です。数値化を通して社会や時代状況を客観的に把握し、新たな視点での創造につなげるセンスを養います」とし、具体的な市場調査に言及している。

そして具体例として「『優美な屍骸』でシュールに発想する」とし、「シュールリアリストの遊戯的な共同制作方法『優美な屍骸』。主語と述語、形容詞と名詞などをそれぞれが別々に考え、ランダムに組み合わせる。すると、常識的な発想では拓き得なかった豊かで独自のイメージの世界が眼前に広がる可能性があります。言葉の組み合わせの意外性から発想を広げる訓練です」と挙げている。

1.3 カリキュラムに関して

カリキュラムに関しては「カリキュラムは基礎的な演習や講義から始まって卒業制作へと至り、そこで大学生活の集大成である作品／媒体を完成させます。こうして身につけた4つの力(創造力・想像力・意志・社会性)は、創造性豊かな人生の構築に必ず役に立ってくれるでしょう」とし、「目指せる職業」として具体的に「小説家／批評家／紀行作家／エッセイスト／ノンフィクション作家／コラムニスト／雑誌ライター／編集者／ジャーナリスト／ゲームシナリオライター／コンテンツ開発／出版／メディア／IT／広報／広告／プランナー／制作管理／芸芸員など」を挙げている。カリキュラムは具体的には以下の表になる(表1)。

4年	3年	2年	1年	
応用		基礎		
文芸研究 卒業制作	ライティング演習1・2 クリエイティブ演習1・2	創作演習1 創作演習4	日本語表現基礎1 日本語表現2 表現基礎1(ペーシクイティン)	文芸学科教員・講師による講義・演習
		DTTP演習(初級) WEBデザイン演習(初級) WEBデザイン演習(上級)	文芸論4(編集概論) 日本語表現基礎2	
文芸研究 卒業制作	エディトリアル演習1・2 クリエイティブ演習1・2	創作演習2 創作演習3	日本語表現1 表現論1・2(選)	その他の科目
バックアップ ほか	キャリア センターの ほか	ゼミ内での 就職指導・ フォロー ほか	文芸論1・6 教養ゼミナール 芸術平和学 芸術鑑賞の喜び 表現論3・6 キャリア形成論 キャリアサポート レポート研究 就業体験 2シミュレーション 日本美術史論 西洋美術史論 ほか	キャリア教育 キャリア支援 プログラム (芸術・福祉・社会)

表1:文芸学科カリキュラム

では耳触りの良いパンフレットの文章から離れて具体的にいくつかの授業を見ていく。1年生・2年生では創作・編集というコース区分けはなく、それぞれの志望の学生が同じ必修授業を受講していく。創作関係の学科必修授業としては1年生向けの日本語表現、2年生向けの創作演習が設置されている。1年生では創作に向かう基礎を学び、2年生では物語論や批評の基礎的な理論を学び自ら書き上げていく演習を行う。編集関係では日本語表現基礎が設置されて

おり、1年生では『百科全書』の記事執筆のために調査・フィールドワーク・考察・研究の基礎が取り上げられている。2年生では創作演習にて企画・出版の基礎から実践に至るまで行われており、実際に出版された企画や、出版に向けて動いている企画が存在している。3年生以降は各ゼミに別れて、それぞれの専門性を高めた内容を追究していくことになる(図2)。



図2:池田雄一ゼミの様子

またこれらとは別に選択必修として多くの授業が開講されている。特に短編講読を中心に行われているのが表現論の授業であり、通称「選」と呼ばれている。これは文芸学科の専任・非常勤の教員がそれぞれ短編小説を選択し、講読を進めていく授業である。2015年度は、前期に古典的文学作品を中心とした授業では横光利一「時間」、キプリング「園丁」、川端康成「禽獣」、ミルハウザー「夜の姉妹団」、太宰治「トカトントン」、カフカ「中庭の扉をたたく」、谷崎潤一郎「悪魔」、フラナリー・オコナー「田舎の善人」、吉行淳之介「驟雨」、クライスト「チリの地震」、藤沢周平「深い海」、大江健三郎「死者の奢り」が取り上げられている。同じく前期開講のエンターテインメントを中心とした授業では東川篤哉「ゆるキャラはなぜ殺される」、北村薫「砂糖合戦」、似鳥鶏「今日から彼氏」、坂口安吾「ああ無情」、柚木麻子「ふたりでいるのに無言で読書」、深緑野分「片想い」、尾崎翠「こおろぎ嬢」、小川洋子「紙店シスター」、初野晴「カマラとアマラの丘」、光原百合「天の音、地の声」、乾石智子「紐結びの魔道師」、小川一水「漂った男」、梶尾真治「時尼に関する覚え書」、小田雅久仁「廃り」、篠田節子「静かな黄昏の国」が取り上げられている。

後期も同様に多様な作品が取り上げられており、一つでは星新一「不満」、村上春樹「螢」、村上春樹「踊る小人」、舞城王太郎「熊の場所」、津村記久子「カソウスキの行方」、吉田修一「最後の息子」、笙野頼子「二百回忌」、絲山秋子「袋小路の男」、絲山秋子「小田切孝の言い分」、揚逸「ワンちゃん」、中原昌也「マリ&フィフィの虐殺ソング

ブック」、古井由吉「杏子」が取り上げられ、もう一つの授業では安部公房「赤い繭」、カフカ「ある学会報告」、夢野久作「斜坑」、ドストエフスキー「おかしい人間の夢」、坂口安吾「桜の森の満開の下」、「武松の虎退治」「かたき討ち」(『水滸伝』)、メルヴィル「バートルビー」、早助よう子「エリちゃんの物理」、武者小路実篤「お目出たき人」、トルストイ「人はなんで生きるか」、魯迅「狂人日記」、仙田学「盗まれた遺書」、武田泰淳「ひかりごけ」、ニーチェ「おしまいの人間たち」が取り上げられている。もちろん、これ以外にも多くの授業が開講されており、文学に限らず、西洋・東洋を問わず、様々な思想を取り上げた講義も行われている(図3)。

これらの通常事業とは別に夏期および冬期にそれぞれ



図3:政治学者・栗原康氏による授業

集中講義が行われている。2015年度においては夏期集中講座としてライトノベル作家の松智洋氏によるライトノベル講座(図4)、児童文学作家の楠章子氏による児童文学の講座(図5)が開講された。冬期はゲームクリエイターの麻野一哉氏によるゲームシナリオ構築および夏期からの連続である楠氏による演習が開講された。文芸学科の通常授業では現役の作家・編集者・評論家・研究者により全般的な講義・演習が行われているが、集中講義では内容を特化し、それぞれ特別講師を招き、授業を開講している。

さて創作関係とは別に企画・出版の授業が存在すること



図4:ライトノベル作家・松智洋氏による授業



図5:児童文学作家・楠章子氏による授業

は既述の通りであるが、具体的な内容としては次の通りになる。2015年後期の「創作演習3」の初回授業内で学生に配布された資料を引用する。

「「創作演習3」では、書籍の企画・編集・制作を中心に授業を進めていきます。具体的な授業の予定は以下のとおりです。ガイダンス(9/29)、①企画についての講義(10/6)、②書籍企画の立案・検討・教員によるレビュー(10/13、10/20)、③チーム分け・書籍企画の実作業(10/27、11/10、11/17、11/24、12/1、12/8)、④中間発表・教員によるレビュー(12/15)、⑤レビューを反映させて最終データ完成までの作業(12/22、1/12)、⑥最終発表(1/19、1/26・4限)、教場レポート(1/26・5限)

②で皆さんに立案してもらった企画をもとに、チーム分けして、実際の書籍制作に近い形での編集・ライティング作業に取り組んでもらいます。いずれも実際の書籍化を目指し、取り組んでください。企画や内容が優秀なもの、実売が見込めるものについては、藝術学舎出版局からの書籍化も検討可能です。

なお、すでに1つ文芸学科で制作を行う企画があります。それは、企画構想学科とのコラボレーションで2016年7月上旬に発行を予定している単行本です。その編集ライティングチームに参加を希望する者は、③のチーム分け以降はそちらの作業にあたってもらいます。一般書になるため、その編集ライティングチームは基本的に野上勇人がサポートします。

皆さんが馴染み深い「小説」「エッセイ」「コミック」「実用書」「雑誌」「Webコンテンツ」などは、すべて編集制作過程を経て、皆さんの手元に届いています。小説やコミックであっても、企画を立て、内容を吟味し、細部を詰める編集作業は必ず行われます。ただ書けば／描けばそのまま本にできるわけではありません。そこには必ず、何らかの他者とのコ

ミュニケーションが介在します。

「創作演習3」では、そうした「書籍＝他人の手に渡るもの」をつくる上でのコミュニケーションを学んでいきます」

また、この企画・出版の授業に向けて、「書籍制作に必要なこと」として以下の点が挙げられ、受講生に提示されている。

・企画

＜企画のバックグラウンド＞

リサーチ、類書調査、著者・監修者選定、ネタの拾い方、企画の設定を知る(出版社の傾向、ジャンル、判型、本文の色、予算)、部数の見込み、プロモーション方法、新規性、二匹目のドジョウ……

＜企画書＞

タイトル、サブタイトル、著者、部数、価格、主旨(企画意図)、構成案、展開案、ページラフ、制作体制(スタッフ案)、類書調査、客観情報……

・構成案(目次)

見出し、並べ方、章立て、項目立て、展開案……

・台割

台割の切り方、折、見開き、色、付き物……

・原稿作成

執筆(分担・依頼)、取材、写真撮影(依頼・撮影立ち会い)、イラスト……

・原稿チェック

内容の吟味、企画意図との照合、校正校閲、修正(指示)……

・デザイン入稿

・校正紙チェック

・印刷入稿

以上のように文学を中心とした多岐に渡った授業を踏まえて、学生たちは自分自身の興味関心を広げ、執筆能力を

研き、最終学年において卒業制作に取り組んでいく。卒業制作展は2014年度が初めての取り組みであったが、文芸学科としては学科の卒業制作作品集(図6)および最優秀賞・優秀賞・文芸学科特別賞を展示し(図7)、教員による講評会を行った。

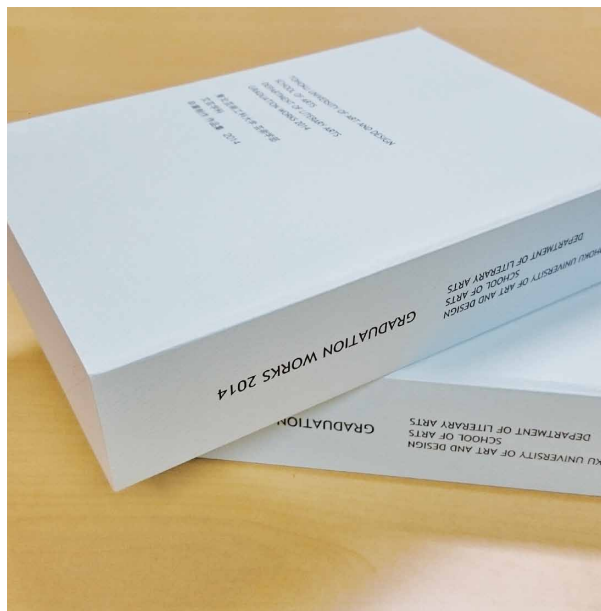


図6:2015年度卒業制作集



図7:卒業制作展の様子

2. 授業に関連した取り組み

2.1 研修旅行

さて授業だけではなく、本学科には授業と連動して課外活動も行われている。そのうち一年生向けとしては研修旅行が設置されている。2012年度は羽黒山に登り、山岳修験の場所を体験することを目的とした(図8)。



図8:2012年度羽黒山での研修旅行

2014年度以降は場所を盛岡周辺へと移し、遠野や宮沢賢治記念館に行き、文学を様々な角度から考える契機を設けている(図9)。さらに2015年度からは「日本語表現基礎1」と連動させて、盛岡市内をただ廻るだけではなく、雑誌記事執筆のために取材を行っている。また盛岡で発行されているリトルプレス誌『てくり』の編集部の方々を招き、雑誌制作のためにどのような取材を行い、記事にし、レイアウト



図9:2014年度遠野での研修旅行



図10:『てくり』編集部による講演

を心がけているのかといったプロの現場について、学生たちからの質問を受け付けながら講演をしてもらった(図10)。

2.2 青果賞・青果展

既述のように文芸学科では1・2年生で基礎的なことを学び、3年生以降はそれぞれのゼミに分かれて、専門的なことを学んでいくというカリキュラムになっている。そのため1つの区切りとして『青果賞』という2年生のみを対象とした賞を設け、2年生までの成果としている。これは2年生が受講する「創作演習2」「創作演習4」と連動した企画で、授業内で創作や評論に関する基礎的な知識を学んだ上で、授



図11:2015年度青果賞受賞作品

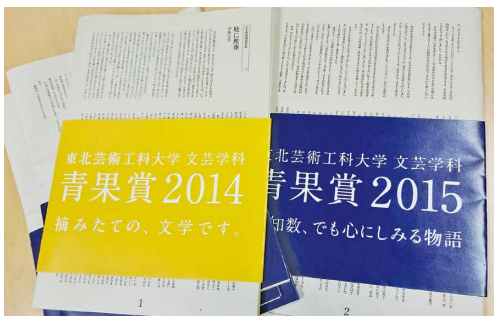


図12:青果賞リーフレット

業での最後の成果として小説もしくは評論を原稿用紙換算で30枚分執筆し、それに対して学生および教員が評価し、優勝者に賞を与えるというものである。学生にとっては学内における最初の賞選考になるため、目標にしている者も多い。教員賞および学生賞の受賞だけではなく、2015年度までは青果賞を展示する青果展も行われており、グラフィック学科の学生と共同で手製本が制作され展示された(図11)。また青果展だけではなくオープンキャンパスなどにおいても配布されている青果賞のリーフレットは、受賞作を収録した新聞形式のものとなっており、学科学生により編集・デザインが行われている(図12)。

3年生以降ではゼミ単位でプロジェクトが進行しており、例えば編集系の野上勇人ゼミでは取材・執筆・デザイン・入稿等々全てを学生が担当したフリーペーパー『Wake up!』が制作され、学内を中心に配布された(図13)。



図13:『Wake Up!』

3. 学外への社会還元

3.1 文芸ラジオ

これまで文芸学科で行われている授業やそれに関連する取り組みを紹介してきたが、それだけでは学科内に留まり、出版など外部への発信につながりにくい側面がある。したがって本学科では外部へ情報発信を行うチャンネルをいくつか設けている。その中で最も力を入れて取り組んでいるのが文芸誌『文芸ラジオ』である(図14)。

『文芸ラジオ』は文芸学科1期生の卒業に合わせて創刊されるように企画された文芸誌である。編集部は池田雄一編集長および玉井建也副編集長、野上勇人副編集長(野上氏は2015年度より)という教員だけではなく、7名の学生スタッフが編集者として参加している。そして執筆者として

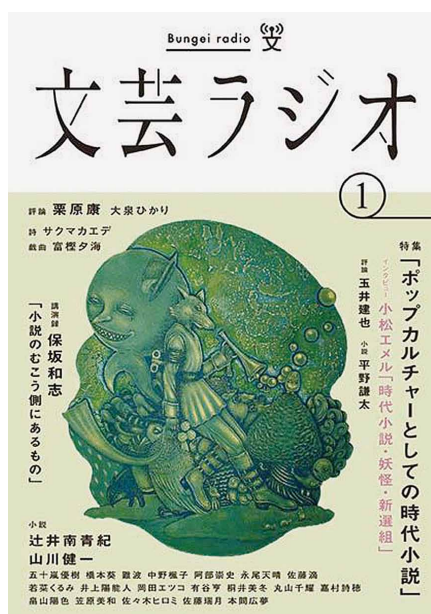


図14:『文芸ラジオ』第1号

も19名の学生が参加している。もちろん保坂和志氏や小松エメル氏、辻井南青紀氏、山川健一などのプロの作家たちにも寄稿やインタビューを依頼しているが、雑誌のほとんどを学生の作品が占めていることになる。この理由の1つとしては池田編集長が述べている「小説・評論は誰かに読まれて初めて成立する」という言葉に集約されている。ただ学科内で執筆し、教員に読んでもらう、同級生に読んでもらうというのは内に籠るだけとなり、それでは真の意味で作品は成立しない。書店やネット販売により全国流通する雑誌に掲載されることで、初めて多くの目にさらされ、作家の個人性に依拠しない批評が投げかけられていくのである。したがって『文芸ラジオ』は単なる文芸誌ではない。東北芸術工科大学における他学科でいうところのイベントスペースであり、画廊であり、美術館であり、映画館でもある。

編集会議は週に1回、授業とは関係なく開催されている。したがって参加している学生スタッフは単位という卒業のために必要な即物的な物差しではなく、編集を学んでいきたいという強い意欲のもとに集まっている。具体的な編集作業としては、春先は企画会議が中心となる。創刊号に関しては「ポップカルチャーとしての時代小説」を特集として企画したが、2016年発行予定の第2号は3つの企画を立ち上げ、取材やインタビュー、執筆依頼などを行っている。

それとは別に執筆者との編集打ち合わせも定期的に行っている(図15)。特に2015年は学生からの投稿を増加させるために学内に作品募集のチラシを貼り、周知させた

ことにより、多様な作品が集まった。そのため創刊号と同様に教員・学生編集部・学生執筆者という三者による打ち合わせを行い、作品のブラッシュアップを行っている。三者での打ち合わせでは、編集経験のある三名の教員とともに学生スタッフが編集打ち合わせに参加することにより、共に学んでいくという教育的な面が大きい。純粋な雑誌制作のプロセスとしては、この作業は効率が悪く必要はない。しかし、教育機関の編集という側面がこの点には含まれている。

また、単に雑誌を発行する活動のみで終わってはいない。まずは創刊号に関するイベントが2015年5月31日に旅作家である小林希氏を招いて東北芸術工科大学にて開催され、同年7月16日には山形市にある八文字屋本店においても創刊イベントが行われた。また、創刊号に寄稿した山川健一により同年9月4日に吉祥寺ブラック&ブルーにて創刊イベントが行われた。単なるトークショーではなく、ロックライブと合わさった空間が創出されたのである。第2号に向けては、同年10月17日にタレントであり作家でもある吉木りさ氏を招いて公開インタビューを行っている。この内容は第2号に収録される予定である。

これらのようなイベントだけではなく、文芸誌の編集という外側からは何をやっているのか見えにくい状況を打破する



図15:文芸ラジオ打ち合わせ風景

ために、定期的にYouTubeに編集部のメンバーによるラジオ番組「文芸ラジオラジオ」をアップしている。それとともにTwitter、Facebookにて情報を公開し、様々な角度から情報発信を行うことを模索している。

また第2号以降としては文芸ラジオ新人賞を創設し、広く全国から作品を募集した。結果に関しては第2号誌上にて発表する。

3.2 花小路文学賞

山形市の繁華街である花小路商店街を舞台とした作品を募集する花小路文学賞が設立された。第1回の審査委員長を本学科の学科長である山川健一がつとめ、本学科教員である玉井建也、および文芸学科の非常勤講師であり怪談作家である黒木あるじ氏、そして花小路商工会の方々が参加し、審査を行った。表彰式は2014年10月19日に行われた(図16)。

なお受賞作品は小冊子としてまとめられ、花小路の各店にて配布された。また受賞者の3名の別の作品は『文芸ラジオ』創刊号に収録された。

3.3 特別講師の招聘

小説や批評を書き、雑誌を作るだけではなく、外に開かれていなければならない。そのこと自体は自明であるが、同じメンバーと常に顔を突き合わせているとその価値観も希薄になりがちである。したがって、本学科では様々な分野の第一人者を呼び、定期的に講演会を開催している。

小説家としては三浦しをん氏、保坂和志氏(図17)、編集者としては東原寛明氏(図18)、見城徹氏、評論家・研究者としては松本潤一郎氏(図19)、三宅陽一郎氏、活動家としてはミサオ・レッドウルフ氏など、冗長なので全員を記さ



図17:保坂和志氏による講演



図18:東原寛明氏による公開編集会議



図19:松本潤一郎氏による講演



図16:花小路文学賞表彰式の様子(山川健一による挨拶)

ないが数多くの著名人に来校を依頼し、講演を行ってもらった。

保坂和志氏による講演は既に『文芸ラジオ』創刊号に収録されており、第2号では三宅陽一郎氏による講演が収録される予定である。

4. 文芸学科から卒業をする

4.1 作家デビュー

『文芸ラジオ』の発刊により成果を内にため込むのではなく、社会に還流させていくことが可能になったが、そこで執筆している学生以外にも本学科からデビューした学生は存在する。

1期生の荒川匠氏は在学中に幻冬舎文庫からデビュー作『ガンスミス』(2014年5月刊行)が刊行された。荒川氏は授業内で執筆した作品が編集者の目に留まり、作家デビューすることになった(図20)。また、小説家ではなくライターとしてデビューした学生もいる。同じく1期生の笠原伊織氏は授業内で企画し、自ら取材・執筆を行った『アノヒカ



図20:荒川匠『ガンスミス』表紙



図21:笠原伊織『アノヒカラジェネレーション』表紙

ラ・ジェネレーション 東日本大震災と東北の若者』(2014年7月刊行)によりデビューした。東日本大震災を経験した若者が同じく被災した若者に取材をし、その言葉を紡いでいく作業は彼にしかできない作品として結実した(図21)。

これら本学科学生が執筆している作品だけではなく、企画・編集に関わった作品もある。本学教員の有賀三夏氏による『本当はすごい“自分”に気づく 女子大生に超人気の美術の授業』(2015年7月刊行)は本学科学生により企画・編集が行われた。実際に授業に参加し、感銘を受けたことにより、この企画がスタートしたため、大学生に向けた分かりやすい内容となっている。このように、今後も学生により企画立案された作品が刊行されていく予定である。

4.2 卒業生の言葉

前節で取り上げた面々だけではなく、多くの学生たちが本学科を巣立っていくことになる。そこで1期生により行われた卒業制作展の案内パンフレットから、卒業生の言葉を引用しよう。

「小説を書くということ自体、初めてだった。大学に入る前は自分が小説を書くなんて思ってもいなかったし、今でもちょっと、恥ずかしい。

大学に入って小説家になりたいという人間がたくさんいることにまず驚いた。そういう学科なのだから当たり前なのだが、今までそういう小説家志望という人にあったことがなかったので、ツチノコの群れを見つけてしまったような気分になった。そんな世にも珍しいツチノコ達に紛れて立派なツチノコになるための講義を受けていると、自分自身もツチノコなのではという錯覚に陥ってきた。室内犬がずっと人間と共に生活を続けているために、自分は人間なのだと思い込んでしまうあれと同じだ。

そうして自分がツチノコであると勘違いして小説のようなものを書き始め、そのまま四年が経ってしまった。

最近になってようやく、そもそも自分はツチノコではなかった、小説家志望ではなかったことに気付いたのだが、四年間ツチノコまっしぐらな道を進んできてしまったため、いつの間にか振る舞いがツチノコ然としてきてしまった。ツチノコではない、つまり小説とはあるいは文学とは遠いところで暮らしている人たちと何を話せばいいのかわからない。同じ言葉を使っているはずなのにコミュニケーションがとれない——

自分にはもうツチノコのように暮らしていく道しかないのか

と思う。でも自分は本物のツチノコではないからツチノコ達に紛れて生きていくにしても、ニセモノだとばれてしまわないようにこそこそと生きていかなければいけない」(I氏)

「文芸学科は「書く」ことが主流であるなか、私は「読む」ことに重きをおいて学んできました。というのも私は作家ではなく編集者になることを目標にしていたためです。

「編集」と一言と言っても、それは様々な形があります。当初私は技術を習得することを目的にしていたのですが、自分にはその前に教養が足りないと感じ、せっかく大学という場所に通っているのだから、ここでしかできない学びに力を入れようと、池田雄一先生のもとへ駆け込みました。

池田ゼミでは、評論や小説を読み、ゼミ生同士意見交換することを毎度行ってきました。ただ読むだけでなく深いところまで考察し自分なりの解釈を見つける、それが面白くて仕方ありませんでした。この作業によって、作品や作家を理解する力が身に付き、編集する上で非常に重要となる力がついたと思います。

正直なところ内定先は描いていた夢とはかけ離れた場所、悔しい思いは今も消えません。けれどだからこそ、ゼミで学んだこと大学で培った全てを、この卒業制作に注ぎこみました。それに賞をいただけたことは救いであり、同時に文芸の教授陣のもとで四年間学べたことが本当に幸せであったと思える出来事となりました。

これから就く職業は心から望んだものではありませんが、それでも研修先の方々がとても暖かいです。ここで働きながら、まだまだ小説を自分なりに読むことは続けていきたいですし、「書く」ことにも、また挑戦したいと思います」(C氏)

「私が文芸学科で学んだことは、小説、論文などに必要な文章表現、批評的な読解法、そして企画を立て、本を制作するために欠かすことのできない編集の過程です。

一、二年時には小説を書き、クラスメイトとお互いに講評し合いながら、文章力を身につけました。批評の授業では、小説を読み、単純な感想を抱くだけではなくさらなる理解を目指し、文章に内包される意味や全体の構造を読み取る力や、自分自身の考察を交えながら書評を書く方法などを学びました。また、私が最も印象に残っているのは、編集作業に取り組む課題でした。ゼミや課外活動を通し、世界を対象化し企画を立てるまでの流れや着眼点、また、メンバーと共に編集会議を行い、一冊の本を制作する具体的な工

程を学びました。

編集者と一口にいても、その仕事がどういったものなのか想像するのが難しい方も多いと思います。私も大学に入ったばかりの頃は、どのように作者と向き合えばいいのか、他者の作品を生かして本という新しい形にしていくにはどうすればいいのか、わからないことばかりでした。けれど、実際に自分が文芸学科の中で様々な企画に携わることで、現実の仕事で起こりうる問題や疑問点と向かい合い、多くのことを学びました。

東京にある株式会社幻冬舎にて編集者としての就職が決まりました。春から四年間文芸学科で学んだことを活かし、オリジナリティ溢れる企画を立て、自分が編集した本が書店に並べることを目標に精一杯努力していきます」(H氏)

ここでも書かれているように文芸学科では文学や編集に関することだけを愚直に学んでいるわけではない。社会に生きている一人の人間として必要な基礎的な教養を自ら見出し、その過程の中に授業が存在するように設計されている。そして本稿の最初に述べた文芸学科で学べる4つの力に戻るのである。「創造力、想像力、意志、社会性」この4つを身に付けた学生は自らの足で立ち上がり、自立した社会人として活動していくはずだ。

なお、文芸学科の学生が如何にして社会と向き合うのかに注視して設計された授業が3年生の前期に受講する「セルフポートレイト研究」および2015年度後期に開講している就活特講になる。これらの授業は、社会と対面するために自分自身を見つめ直す概念的な内容から、個々の情報などの業界研究に至るまで多岐に渡っている。